慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

100 years

新春特別座談会

# 2021年から始まる新たな道のり

## ～コロナ禍からの再生～

きれいになった２号館の新しい応接室にて

2020年は、慶應義塾病院、三四会、慶應医師会が設立100年を迎え、東京オリンピック・パラリンピックという一大イベントが開催されるなど、希望に満ちた年になるはずでした。ところが、新型コロナウイルスの感染拡大によって状況が一変。全てのイベントは中止や延期を余儀なくされ、医学部、病院ともに苦しい1年となりました。2020年12月現在にあっても第3波という感染拡大が続いていますが、社中一丸となってこの状況を乗り越えようと闘い続けています。「新しい生活洋式」が求められ、医療の在り方が見直されるコロナ禍においてどうやって未来を築いていくか、慶應義塾、医学部、病院それぞれの視点を交えつつ、2021年に向けた思いを語り合ってもらいました。（本文中は敬称略）

■聞き手：医学部新聞編集委員長

### コロナ禍で見えた希望の光
### 社中一丸を肌で感じた2020年

**門川**　新年明けましておめでとうございます。2020年のトピックは新型コロナウイルスの感染拡大に尽きますが、皆さんにとってどのような年だったでしょうか。まずは2020年を振り返ってお話しください。

**竹内**　本来であれば、2020年は東京オリンピック・パラリンピックを迎えるなど明るい話題に満ちた一年になるはずでしたが、想定外の危機に見舞われた年でした。教育面での影響は塾全体および、大学、一貫校の全ての学生・生徒は通常の対面での授業ができず、アルバイトができなくなった学生などもおられたと伺っています。医学部、病院への打撃は計り知れないほどで、病院は財政面でも大きな影響がありました。そんな中にあっても、日吉の記念館、慶應ミュージアムコモンズがオープンするなど、塾としてのさまざまな事業を着実に進めることができました。病院でも2号館改修が進められ、1号棟、2号棟、中央棟の一部機能は2号館に移転し、教職員の皆さんにとって待望のロッカー室ができました。今までは看護師さんたちも暗い夜道を通ってロッカー室を行き来していましたので、その点はよかったと思います。これからも改修工事が続き、皆さんにとってより良い環境が整っていきます。

**天谷**　医学部にとっても、新型コロナのインパクトは甚大なものがありました。卒業式や入学式が中止になり、春はキャンパスが閉鎖されて授業はオンラインとなりました。7月からは解剖実習、9月からは臨床実習と慎重に準備を進めつつ徐々に対面機会を増やしていますが、まだまだ大変な状況です。研究でも多くの困難がありましたが、慶應ドンネルプロジェクトが立ち上がったことは大きな一歩でした。病院内で起こった未曾有の事態に対して、直接診療には関わらない研究者たちが自分たちの立場でできることをしようと立ち上がったのが慶應ドンネルプロジェクトです。普段はそれぞれのベクトルは異なり、各分野で先鋭的に進んでいますが、いざというときの集結力は極めて強く、一家族のごとくという私たちの伝統が裏付けられていると実感しました。これまでに、疫学的解析やウイルスゲノム解析を始め、中和抗体測定キットの開発、重症化リスク因子の新規同定など、数多くの成果を挙げています。

**門川**　教育に携わってきた立場としてもこの1年間は本当に大変でしたが、実は以前から構想していた授業のアーカイブ化などが一気に実現する機会にもなりました。また、各科、各教室がそれぞれにとってすべき教育を見つめ直す良いきっかけにもなったと思うので、今年以降それらが花開いてくれればと願っています。

**天谷**　それまでは他の教室が行う教育を見る機会がありませんでしたが、同じプラットフォーム上で互いのコンテンツを見ることは大いに刺激になりますし、FD（ファカルティディベロップメント）の原動力にもなるでしょうね。今回作ったコンテンツをさらに進化させ、社会に向けて公開することも可能になりますから、非常にポジティブな影響があったと思います。

**門川**　病院の苦労はさらに大きかったのではないでしょうか。

**北川**　そうですね。もっとも甚大な影響を受けたのが病院だったと思います。2020年、病院開設100周年という記念すべき年に、オリンピック、パラリンピック開催の中で社会に貢献することが当院の社会的使命であり、これをしっかり実現することが大きな目標でした。しかし、そうした期待が全て崩れてしまった一年でした。当院では3月末から4月にかけて院内感染、研修医集団感染という大きな事案が発生しました。私はその責任者として皆様に大変なご心配、ご迷惑をかけてしまいました。現在に至るまで予断を許さない状況が続いていますが、厳しい状況に陥った時にも、教職員全ての皆さんが団結して助けてくれることのありがたさをしみじみと実感しました。3月から4月の第一波の頃は、皆が連日夜遅くまでさまざまな対応をしながら執行部エリアに詰めてくれていました。慶應義塾全体でも病院緊急支援の寄附活動を立ちあげていただき、またたく間に多大なご支援をいただきました。まだ事態は収束していませんから過去形の話ではありませんが、医学部・病院の教職員の皆さん、三四会員の皆さん、そして慶應義塾社中の皆さんのありがたさを改めて感じた一年でした。

**天谷**　三四会の皆さんには、医学部も多大なるご支援をいただきました。慶應ドンネルプロジェクトへのご寄付、新型コロナにより困窮している学生へのご支援、本当にありがとうございます。どちらも非常に迅速に進めていただき、特に学生たちは心から感謝しております。この場を借りて改めてお礼申し上げます。

### 教育改革や病院改修を推進して
### ピンチをチャンスに変える

**門川**　2021年はさまざまなプロジェクトが順調に進んでほしいと願っていますが、現時点ではどのような計画があるのでしょうか。

**竹内**　確かに2020年は大変な年でしたが、北川病院長も言っていた通り、慶應義塾の団結力の強さを感じることが多々あり、学内外から応援していただきました。ですから、2021年は雨降って地固まる例えの如く、非常に強い地盤の上に新しい慶應医学を構築する年にしたいと願っています。病院については、残されていた総合医学研究棟の事務部門の移転、イノベーション用スペース、講義大教室などの整備が終わり、いよいよ2号館が本格始動する年となります。先ほどお話しした食堂も、病院長のお計らいでオープンすることになるでしょう。それに合わせて、1号棟、2号棟、中央棟の解体が終わります。外構整備はまだ完全には終わりませんが、解体後の駐車場、エントランス棟の整備、最終的には立体駐車場の整備も含めて2022年度の完全な新病院棟完成に向けて非常に重要な一年となるはずです。また、予防医療センターの拡充など、新しい試みが2021年度にスタートする見通しです。連の病院整備が終わった後は、東校舎を中心とした信濃町キャンパスの北側の土地を使って、いよいよ教育の施設設備に向けた動きが始まります。

**天谷**　2号館の整備については、慶應義塾からの多大な支援がありましたね。

**竹内**　そのことについては、ここできちんとお伝えする必要がありますね。清家塾長時代には1号館の建設に全力であたっていただきました。その中で、2号館の改修費用については予算化できずにおりました。2号館の改修をしないという選択肢もあった中で、長谷山塾長をはじめとした現執行部のご判断で塾がトータル100億円を超える予算を承認くださり、立派に2号館の改修が進んでいます。やはり1号館単独では病院機能を完全に発揮することは難しく、2号館があって1号館、3号館が生きる形になったと思います。

**天谷**　2021年の目標は、withコロナ、ポストコロナにおける時代を先導する信濃町キャンパスをデザインすることだと思っています。教育でいえば、オンライン教育のさらなる充実です。デジタル化した教育コンテンツの質を高め、より学びやすく、学外に公開できるような設備や体制を取っていきます。また、この機会により一層のペーパーレス化を進めます。そして、学部長拝命時から最重要課題としてきた教育改革について、いよいよ2021年度からカリキュラム改訂が実装されます。これは多様性のある人材を伸ばせるだけ伸ばすことを大きな目標としたもので、3年生の自主学習期間は夏休みを含む4カ月となり、海外や国内の機関に行くなど可能性が大いに広がります。また、従来はずっと日吉キャンパスで過ごしてきた1年生が、週に1回信濃町キャンパスで授業を受けるようになります。多様性のある人材を受け入れる取り組みとして、帰国生、留学生の入試制度改革も行いました。

研究面では、理工学部との連携によるビッグデータ解析を中心とした新規講座、薬学部との連携による病院薬剤学（仮称）が始まります。加えて、まったく新しい分野の基礎医学教室の開設も検討中です。大きな目標のひとつである将来性のある若い人材の発掘および育成については、昨年10月から若手教授たちを世話人とした新次元開拓セミナーがスタートしました。今年4月から稼働予定の慶應バイオバンクは、将来の慶應医学部・病院の大きな財産になるはずです。2021年のもうひとつの重大なキーワードはデータサイエンスであると考えており、医療健康データの共通デジタル研究基盤の整備と、それらを活用した基礎臨床一体型の研究の推進と、これまでとは異なる次元での解析が可能となることを目指していきます。

**北川**　慶應義塾大学病院では、厳しい2020年の中で唯一といえる朗報がありました。医学部新聞の令和2年8月号にも書きましたが、2019年の病院収支が大幅に改善し、医療収入67億円増で赤字予算となりました。2019年は、病院全体が一丸となって高稼働、高回転で、実績をあげることができました。2020年の3月、4月は、患者さん、教職員の皆さんをコロナ禍の中で守ることしか考えられませんでしたが、現在は診療機能を徐々に回復しつつあります。しかし、今後これまでと同じやり方で2019年の病院運営状況を再現することは難しいと考えています。感染対策のさらなる徹底のためには、診療の場で「密」「ピーク」を作ることを避けなければなりません。例えば月曜日午前は教授外来が多く朝から混み合いますが、患者さんのリスクを減らすために、私の外来も木曜日の午後に変えました。手術の予定も土曜日の午後まで入れるようにして、過度な負担が特定の人員や時間に集中しない診療体制を組むようにしています。チーム医療を推進して、何かあってもその患者さんのことを十分理解した別の医師が対応できるようにする。こうした変化は患者さんにもご理解いただき、考え方を変えていかないといけないと思います。

コロナ禍の影響で、今まで当たり前だったことができなくなりました。そのひとつが入院中の面会です。面会は入院患者さんの心のケアとして重要で、親しい友人やご家族の顔を見ることで励まされるものですが、現状ではそれができません。そこで、WEB会議のような形を使った面談を実施したり、一定のルールを設けて長期入院の方に安全な面会の仕組みを作っていくなど様々な方法を模索している最中です。医療の形態が否応なしに変わってきています。

**竹内**　iPadを使った面会を全部病室でできるようにすることを2021年の目標としてもいいと思いますね。

**北川**　試験的にアバターを使った遠隔面会も実施しています。AIホスピタル事業ではアトピー性皮膚炎やリウマチなどの慢性疾患を抱えた患者さんの状態を来院しなくても日々細かくモニターできるシステムを稼働しています。当院には難しい疾患の治療を受けるためにかなり遠方から来院される患者さんも多いので、まずはセカンドオピニオン外来などからオンライン診療を導入しております。2018年からスタートしたAIホスピタル事業は、コロナ禍によって自ずと一気に推進せざるをえないフェーズに入りました。守るべきものは守り、変えるべきものは大胆に変える、そんな動きのある2021年になるのではないかと思っています。

### 人間関係構築や国際交流など
### withコロナ時代をどう生き抜くか

**門川**　個人的には、2020年はいろいろな意味で効率化、合理化が一気に進んだ年だと感じていますが、一方で、そのような中で取り残されてしまった人がかなりいるのではないかと危惧しています。キャンパス内でれ違ったときに話をするようなことができないから、いちいちZOOMなどで会議を設定しなければいけません。特に学生のことが気がかりですが、2021年はそのような状況にある人たちのことも考えていかなければいけないと考えています。

**北川**　すでに顔見知りならいいのですが、現在の状況で新しい人間関係が築くことの難しさも痛感しています。外科では、2020年4月から卒後5年目の後期研修医諸君が大学に赴任しましたが、未だ全員の素顔を見ることができていません。

**天谷**　全員マスクをしていますしね。

**北川**　オンライン会議などでも会話していますが、皆マスクをしていますので院内ですれ違っても自分の教室員かどうかすら分かりません。今はフェイストゥフェイスでの会話ができないので、新しい人間関係を作ることが本当に難しいと感じています。

**竹内**　さまざまな人が集まって無駄話をするコモンズと呼ばれる場所が必要で、人と人が実際に触れ合って何気ない会話をし、周りの人もなんとなくその会話を耳にすることで知識が広がり、人間関係ができるはずです。本当はそういう場所が信濃町キャンパスにあるといいのですけれど。

**天谷**　「無駄のありがたさ」というものがありますね。人間関係を構築するのは効率性ではなく無駄だったということかもしれません。

**門川**　学会のオンライン開催は、だいぶひろまりましたが、学会の重要な機能であるネットワークづくりは難しいですね。2021年はそういったところにフォーカスされるのではないかと思っています。

**竹内**　理研の松本紘理事長が信濃町キャンパスを訪問された際に、リサーチパークの前のキッチンカーにとても興味を示しておられました。あのようなスペースをコミュニケーションの場として活用することなど考えてみてもいいかもしれません。

**北川**　今は極力そういったことを止めているわけで、研修医ラウンジでは食事ができませんから、みんな昼食は孤食です。お昼休みの何気ないコミュニケーションができない状況は本当につらいところです。

**門川**　現状では、気軽に学外の方が医学部や病院を訪問できない状況なので、学外で臨床研修を行った人で、専修医プログラムで慶應義塾大学病院に戻る卒業生が減るのではないかと懸念しています。

**北川**　私はこのような事態になってみて、人的交流、人の出入りが活発なことが大学病院の思わぬ弱点であるとわかりました。研修医の集団感染が判明したのは初期研修医が研修を終えて、一斉に他の施設に赴任する直前の3月31日でした。難しい判断でしたが4月1日からの人事異動を一旦止めて、感染拡大防止を最優先とせざるを得ませんでした。外勤先も各診療科マネジメントしているので、病院では瞬時に状況を把握し制御することができません。公的病院やセンター病院は原則として外勤には行かないので感染対策や医療従事者の健康管理がしやすいのに比べて、大学病院ではそれが非常に難しいことがわかりました。

**竹内**　本来はそれが大学病院の強みであるはずですが、新興感染症においては弱点になるということですね。

**北川**　そうです。流動性があり、開かれていて、さまざまな情報が入ってくることが強みなのですが、感染ということになるとそこが弱点になってしまう。これをどう乗り越えるかは大きな課題です。

**天谷**　もうひとつ、私の中で大きな問題として捉えているのが国際連携です。国際連携も一気に止まってしまいましたが、国際連携も慶應大学の強みでした。これからのwithコロナ、ポストコロナの時代にどうやってその強みを維持していくかは頭を悩ませています。とはいえ、テレビ会議もWEB会議もない20年前とは違ってインターネットを介した交流はできますから、テクノロジーを上手く使って、できるだけシームレスに障害を感じずに国際連携や人の交流を続けようとしています。

**門川**　海外に行けなくなってしまった学生もかわいそうで、これまで力を入れてきたアメ留（短期留学制度）に参加できません。思い切って半年間行けるくらいにカリキュラムを変えれば、自己隔離期間があっても十分に学べるのではないかと思います。

**北川**　確かに、この状況でも長期の海外留学希望者は減っていませんね。

**門川**　オンライン授業なら海外で受講することもできますし、そこは柔軟に学生たちの思いを後押ししてあげたいと思います。

**天谷**　そこは攻めていいことだと思います。少人数でもそういう人が出てくれれば、こんなことが可能なのだと、だんだん標準になっていくでしょう。新しいことをするには学生にも教員にもリスクはありますが、そういったことは積極的に進めて行くべきだと思っています。

**門川**　2021年になっても苦しい状況にあることには変わりありませんが、先生方のお話しを伺って明るい兆しがあることに希望も感じました。医療の最前線で奮闘しつつ、より良い2021年を実現していきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

座談会中は全員マスク着用で行いました

Tsutomu Takeuchi
常任理事
竹内　勤（59回）

Masayuki Amagai
医学部長
天谷　雅行（64回）

Yuko Kitagawa
病院長
北川　雄光（65回）

Toshiaki Monkawa
医学部新聞編集委員長
門川　俊明（70回）

### 編集後記

2020年のCOVID-19感染症パンデミックは、医学教育に大きなインパクトを与えた。臨床実習や基礎医学実習ではかなりの制限が加えられ、特に、1学期は臨床実習もオンラインで実施された。これを臨床実習といってよいのかはわからない。

しかし、長年の懸案だった、医学教育へのICTの導入は一気に進んだ。すべての授業を動画アーカイブにして、学生の学習方法に多様性を与え、長期の留学を可能にするレクチャーアーカイブを2019年に立ち上げたが、全科目カバーするには3年くらいかかると思っていた。しかし、今回、強制的に全科目、動画でアーカイブ化されたので、たった一年で完成してしまった。

教育の内容に関しても、オンラインに切り替わることをきっかけに、改めて、授業の目的、試験の目的、方法を一から考え直さなければならなくなった。ファカルティデベロップメントの出席率がよくないというのも長年の悩みであったが、オンラインで実施することで、2020年から、全員義務化が実現できた。2021年に入学する学生から、1年生も週に半日、信濃町に通学して、専門教育を受けるが、2020年急遽行なった、慶應医学ショーケース、2年生に向けてのプレ自主学習で、2021年のカリキュラムのトライアルができて、手応えを感じている。

もちろん、今の教育体制がベストとは思わない。教員と学生、学生同士のインターアクションがないというのは、致命的な問題であるし、臨床実習にも、大きな制限がかかっている。しかし、平時に戻った時に、2020年に得られたことを生かしていけば、理想とする教育に近づけると信じている。一番時間がかかると考えていた部分が、COVID-19のおかげで、一気に出来上がってしまったというのが、2020年の医学教育の振り返りである。

（医学教育統轄センター　門川俊明　70回）